

## 使徒言行録 22 章 30 節-23 章 11 節

### 『主が彼のもとに立って下さる』

パウロはユダヤ人たちによって捕らえられ、リンチを受けているところを駆けつけた千人隊長によって捕縛（ほばく）され、尋問を受けることになりました。兵営に連れていかれる途中パウロはユダヤ人に向かって、弁明がしたいと言って演説をした。それが使徒言行録 22 章でした。しかしパウロの演説を聞いた人々は、ますます激昂して「こんな男は地上から除いてしまえ」とわめき立てました。千人隊長は、もとより宗教的な問題に口を挟む気はありません。ただエルサレムの治安と政治的な騒乱が心配なのです。その点を調べようと思っているとき、千人隊長はパウロがローマの市民権を持っていることを知り、驚くとともに迂闊なことはできないと判断し、どうしてこの男がユダヤ人から訴えられているのか、祭司長や最高法院のメンバーを招集し、彼らの前でパウロの尋問を行うことにしました。それが今日の聖書箇所です。

使徒言行録を読み進んで、すでに後半に入っていますが、使徒言行録の後半はパウロの言動やパウロの身に起こったことで埋め尽くされています。けれども、だからと言って使徒言行録の著者ルカはパウロの伝記を書きたかったわけではありません。そういう関心はない。ルカはイエス・キリストの福音がどのようにして、異邦人に間に広がり、世界へと広がっていったのか、そのことを書きしるしたかったのです。そのために伝道者パウロの歩みを詳しく記すこと、という形になっていったということです。

さて、今日の聖書箇所を読んで、パウロはユダヤの最高法院、祭司長といったユダヤ教の指導者たちに向かって何が語りたかったのだろう、とあらためて思うのです。というのも、この最高法院でのやり取りを読む限り、パウロは自己弁明に終始するというような態度ではなく、逆に大祭司に対して批判的だったり、自分が危険にさらされている状態だというより、平等の立場で語っている、という印象なのです。パウロは最高法院で何が言いたかったのだろうか。そう考えるのです。6 節の後半「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」このパウロの発言は最高法院のメンバーの一部がサドカイ派という復活も天使も霊もない、と考えている現世主義者たちで、一方のファリサイ派は復活を信じる人々だったということを知っていて論争を引き起こ

すための発言だった、という観方もありますし、事実論争が生じたようです。しかしパウロは、ただ単に両方の立場の人たちに論争を起こさせるために、復活の話をしたのではない。ユダヤ教の指導者たちに向かってわたしは死者が復活するという望みを抱いているのだ、ということが言いたかったのではないか。

パウロは彼の書いた手紙の中で、「復活」のことをたくさん、いろいろな形で書いています。パウロが受けとめていた「復活」ということで、今二つのことを申し上げたいと思います。

一つは言うまでもなく、イエス・キリストが十字架において死に、その死の床から、三日後に神によって甦らされた、ということです。

キリストが十字架で死んで、甦ったということ、それは人間の罪をキリストが担い、背負い、買い取った贖った、罪の贖いです。それと同時に、人間の死も贖ったのです。つまり、人間をもっとも深く拘束し、縛り付けているもの、罪と死を神はキリストの十字架と復活によって贖い、解き放って下さった。キリストがよみがえった、ということは、人間を支配する死の力は神によって打ち破られたということです。この問題に関する最終的な決着を神がつけた、ということです。わたしたちは相変わらず、罪に苦しみ悶える、死はいまだにわたしたちにとって最も大きな力を奮うものです。だが、最終的な決着はつけた。神の勝利であって、死の敗北、死の力は滅ぼされた。それがキリストの復活です。

交通事故で大けがをした人が病床でうんうんうなっている。顔も手足も傷だらけ。打撲もひどく痛い。見舞いに来た人たちは、病人を見て、深刻な想像をする。だが、この人を見た医師は、十分な検査や治療をした結果、この人は十分回復する、日にちはかかるが、どこも致命的なものはなく、治ると言われた。

最終的には必ず治る。だが、今は苦しんでいる、満身創痍。しかしすでに、この人は大丈夫。問題ない。医師はそう判断し、患者に伝えた。わたしたちにとってキリストの復活とは、そのような知らせ以外の何ものでもない。わたしたちは今地上にあって、罪に苦しみ、悶えているし、死の力のまえではねじ伏せられている。だが、わたしたちは根本大丈夫。キリストが復活して死に勝利したからです。キリストがわたしたちに代わって最終的な勝利を収めてくださった。わたしたちはまだ復活を経験していないけれど、キリストの復活の光の中にいる。最終決着がついたその光の中にいる。パウロはそう語っています。

そしてもう一つ。パウロが復活ということではっきりと語っている大事なことがあります。それは、復活して、神のもとへ帰っていかれたキリストが間もなくこの地

上に戻ってきて、キリスト再臨の時には、わたしたちも甦らせてくださる、わたしたちの復活の使信です。

新約聖書にある中では最初のパウロの手紙、テサロニケの信徒への手紙の中に、「すなわち、神のラッパが鳴り響くと、主ご自身が天から降ってこられます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。」ここでパウロは、キリスト再臨の時にはすでに死んでいる者から始まり、今生きている者たち、すべてのものが最後には復活させられる、と語る。これはパウロが空想して描いたのではなく、主イエスの言葉を受け取ったパウロが書き取ったものです。そしていつまでも、キリストと共に、神と共にいる、というのです。

これはヨハネの黙示録が語る、終末、新天新地が降ってくる時の様子と、細部の違いはあっても事柄としては同じことが表現されている。黙示録には「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの眼の涙をことごとく拭い去ってくださる。」

わたしたちは、この地上での日々、キリストの十字架によって罪担われ、赦され、復活によって、最終的な勝利を仰いで、恵みの場に移されて活かされる。だが、死んだら、それで、終わり、あとはわからない、というのではない。

死んで、どのような形でか神によって活かされ、終末の時には復活させられる。それは今のからだ、今の肉体と同じものではない。復活のからだに。そして神とキリストと共に住む。神はわたしたちと共に住む、わたしたちの神で永遠にあり続けてくださる、それがわたしたちに約束されている恵みなのです。つまり聖書にはわたしたちの最終のゴールがはっきりと明示されている。わたしたちも神によって復活させられて、神と共に住む、キリストと共に住む、それが究極の到着点。

神と共に住む、ということがわたしたちの最終のゴールだというのはとても興味深いことです。あれをするこれをするというのではなく、住むのです。例えば私たちの地上の生は、住むということと切り離せない。家族と共に住む、友人と一緒に住む。寮で人と共に住む。一人で住む。愛する人と共に住む。共に住むことは存在を共有する最も深いもの。黙示録で神が人と共に住み、と言

われる住むという言葉は、新約聖書でもう一箇所ヨハネによる福音書の冒頭で、「言葉は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」という中での宿られた、が住むという言葉で、用いられている。キリストのこの世界にお生まれになって、わたしたちの間に住まわれた、というのです。これほどのわたしたちへの愛はないのではないか、と思うのです。そして終末の時には、わたしたちは神と共に住む、キリスト共に住むのです。

パウロは、キリストと共に住む、という喜びと望みの中で生きた人でした。フィリピの信徒への手紙の中で、地上で実り多い働きをすることも大事、だが一方でわたしはこの世を去って、キリストと共にいたいと熱望している、といいます。キリストと共に住むその時を熱望し、待ち望む。またそのことが約束されている。パウロはユダヤの指導者たちにこの復活の望み、復活の約束を語りたかったのだと思います。最高法院は紛糾しました。激しい論争が起こった。しかしパウロは同じ神を信じる者として、ユダヤの人々に、わたしたちの信仰は、地上だけのものではない。終末の約束の生きるものだ、ということを伝えたかった。そしてそれはキリストの復活によってわたしたちに知らされた福音なのだ、という思いがパウロの言葉の背後にはあったのです。千人隊長は、パウロの身の危険を感じて、人々にもみくちやにされているパウロを力づくで助け、兵営に連れていくよう命じました。

その夜、主はパウロのそばに立っていわれました。「勇気を出せ、あなたは、わたしについてエルサレムに向かって強く証言しぬいたのだから、ローマに向かってもそのように証言しないといけない。」主はパウロの傍らに立って励ましの言葉を語られた。行く手定かならぬ状況の中で、ローマへの道が約束される言葉をパウロは与えられた。主から与えられる約束の恵みを信じて生きる、そこに、わたしたちの生きる根本の姿があることを示されるのです。